

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE

vol. 57 2019年12月



〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

<http://nofence.jp/>

で又言ひ難いの五叶計人の歴史、お次難いが難いが歴史の裏半面。式JもJ開
無台を論議のとて、お葉戻の論議のさうこの会草書上はるけJ來更あらざ

北朝鮮の人道犯罪を止める国際 NGO 連合 (ICNK)が文在寅大統領に手紙 (2019. 12.6)

この年末、日本では北送事業 60 年(1959 年 12 月 14 日新潟から北朝鮮への帰国船=北送船が出た)を迎えてのイベントが集中しましたが(この報告は後述)、国際的には注目すべき手紙が、12 月 16 日に ICNK(2011 年 9 月発足)から韓国の文在寅大統領に発せられました。NOFENCE もこの手紙に賛同していますが、重要な手紙ですので、以下日本語に訳し、皆様にお知らせします。

「北朝鮮の人権に対する大韓民国の姿勢について」

私たちは朝鮮民主主義人民共和国(DPRK)による今も続いている人権侵害に、あなたの政府が益々それに背を向けていることに関して、アジア、アフリカ、南北アメリカ、ヨーロッパの 23 か国の 70 の NGO, 諸連合、10 名の個人を代表して、以下のことを申し上げます。

第一に、私たちは去る 11 月 14 日の国連総会の第三委員会での北朝鮮の人権状況に関する決議の投票に際して、共同発起人にならなかった韓国政府の決定に困惑しています。

第二に、私たちはあなたの政府が 11 月 7 日 2 人の北朝鮮漁民を殺人の罪で、北への送還のあと拷問や他の深刻な人権侵害の実質的な危険に直面する人に対し、必要な法の手続きと保護をする大韓民国の義務を果たさずに、直ちに北に送り返したことを懸念しています。

11 月 15 日韓国外務省は、共同発起人にならなかった決定(判断)は、朝鮮半島全体の状況に関する配慮に基づいたものだと言明しました。外務省は政府の北朝鮮人権状況に対する関心には変化はなく、北朝鮮の人々の人権を実質的に促進するために努力することを誓うといい、韓国政府はそれを「朝鮮半島の平和と繁栄〔の促進〕を通して行う」と付け加えました。

しかしながら、あなたの政府の戦術は、朝鮮半島の対話に携わることへのより増

大する意志と引き換えに、北朝鮮の不正な態度を韓国政府は見逃すつもりだという誤った印象を平壌が得る可能性があるので、北朝鮮の犯罪は制裁を受けないというメッセージを北朝鮮政府に送るリスクを犯しています。人権批判の社会的(公の)批判を止める理由はどこにもありません。対話と公的な人権批判は相互に矛盾するものではありません。私たちは人権保護の改善が、対話の促進、文化的な変化または開発プロジェクトを直ちに実現することはできないことにも注意します。私たちはまた平和の達成または南北朝鮮間の協力の促進が、北朝鮮の人権侵害の全ての公的な議論を全て回避することに依存していると誤って考えるアプローチも懸念しています。これらの必要な人権議論から後退することは、世界で最もひどい人権侵害に責任のある北朝鮮指導層を勇気づけるだけです。

2014、2015、2016、2017 各年の北朝鮮人権侵害に関する国連安全保障理事会の討議は、北朝鮮の人権侵害と地域の平和と安全との間の固有な関係を強調しました。朝鮮半島の堅固で持続的な解決は、平壌の人権抑圧の実績に言及することを要求している以上、理事会のこれらの議論の放棄は、これらの議論を台無しにするアプローチです。

2019年10月24日、国連総会で、北朝鮮人権特別報告官トマス・オジエア・キンタナ氏は、建設的な対話への道の探求を世界諸国に強く求めました。同時に交渉の中で人権問題を傍観視することを止めるべきだと強調しました。彼は注意を促しました、基本的な人権を現在の諸交渉の中に統合することは、朝鮮半島の非核化と平和の持続にとって決定的に大事であると。

私たちは同意する、私たちの見解では、人権について沈黙し行動しないことは、人権侵害を促すことであると。私たちはあなたに強く求めます。

1. 今月末に国連総会でそれがパスする前に、北朝鮮人権状況に関する第三委員会決議の共同発起人国のリストに加わることを。
2. 韓国が送還されて拷問と他の虐待を受けない権利を守るよう、正しい行動黨を取り、保証すること。韓国政府は2人の北朝鮮漁民の国外追放を調査し、その処理文書を公開し、2人の漁夫の基本的人権を破壊した役人の責任を明らかにすべきである。
3. あなたの政府が安保理で北朝鮮の人権侵害に沈黙していることへの私たちの失望を大いに強調したい。なぜなら、安保理での北朝鮮の人権に関する議論が、北朝鮮の深刻な人権侵害を国際社会の平和と安全への脅威であると明らかにする価値ある機会を提供することになるのであるから。

私たちは北朝鮮当局が人権批判と対決していることを知っています。北朝鮮は国連総会決議を「政治的動機に基づく向こう見ずな挑戦である」と否定しています。そして近づく国連安保理討議についても同じようなステートメントを出しています。

しかしながら、北朝鮮の怒号に屈服して沈黙を守ることは、北朝鮮の人権状況の改善を促すことにはなりません。反対に、私たちは将来にわたって改善を確実にする(保障する)唯一の道(方法)は、変化の必要に関するメッセージを、すなわち北朝鮮が人権改善を実現し、国連の全ての人権機構と協力を開始しない限り、国際社会は北朝鮮を完全に迎え入れることはないというメッセージを、北朝鮮政府が継続して聞くことである、と確信しています(小川 晴久訳)。

12月13日「日韓北朝鮮人権セミナー」(於国会第1議員会館)で語られた二人の証言を以下に紹介します。

「私は何故、北朝鮮に行き、何故また日本に戻ったのか」

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会副代表

世界脱北民連帯日本支部長 木下公勝

私は1961年に北朝鮮に行き、2007年に日本に戻った。半世紀に近い歳月が流れていた。16歳で北朝鮮に行き、62歳の老人になって生まれ故郷の日本に帰ってきた。若き青春時代の夢と希望を咲かせることも出来ず、あまりにも虚無な人生を生きた過去だった。

しかし、成田飛行場に降りて日本下の地を踏み、空気を吸い込んだ瞬間、肩にかかる重圧と心のコンプレックスが一瞬に吹っ飛んでしまった。解放感と爽快感で涙が出た。「地獄から天国に来たのだ」と言う気持から來た安堵の涙だった。

日本に来て各地へ行って講演会に参加した時、聴衆からいつも受けた質問は「どうしてそんな酷い北朝鮮に行くことになったか?」と言う質問がほとんどで、また「北朝鮮に行って、一番苦しかったことは、そして、どのような動機で脱北を決心したのか?」と言う質問が多くあった。最初の質問に対し、私は時間の関係で簡単明瞭に100分の1に凝縮して答えた。

「親と一緒に北に行ったのは、金日成と韓德鉢(ハン・ドクス)。朝鮮総連の当時の議長)の政治宣伝に騙されたからです。私の父母が総連に行って『北朝鮮に帰国させて下さい』と言ったことはない。総連幹部が執拗に何度も家に来て、『日本で民族的差別と蔑視を受け、職業もなく、子供達を勉強させるのも大変なのに何故、共和国に行こうとしないのか?』金日成首相様は、帰国同胞達には『職業の心配も、子供達の教育問題も心配することもない。暮らす家や食べる心配もなく、病院に行っても無償治療だ。学校は無料教育など全ての生活問題は、われわれ人民共和国が全面的に配慮し解決します』と在日同胞に呼びかけて下さいました』と勧められたので、行ったのです」

その時の宣伝で耳に入ったのが「社会主义・地上の楽園」と言う美辞麗句であった。私達、兄弟姉妹5人の内、4人が学生だったので、父は自分より子供たちの未来を思って帰国申請に同意したのであった。これが一生涯、取り返しの出来ない苦難の始まりであった。

次の「一番苦しかったことは」との質問には、こう答えた。

「北に行った時から食物が不足していたので、日本から持って行った自転車、ミシン、時計、服などを売り飛ばして食料を買って暮らしていた。日本からの仕送り、送金など全てを食料品購入に充てて、全てを失った」

「一番、辛かったことは」という問い合わせ、「自由がはく奪され、行動の自由、表現の自由、言論の自由が完全に抹殺され、常に統制され、監視され、密告されている社会で生きていくことが一番辛かった」と答えた。

また、脱北の動機については「第一の動機は、食べ物が無く、数百万の人々が毎日飢えて死んでいくのを日々、目撃していたので、私自身も恐怖に襲われて脱北を決心した。第二の動機は、自由への渴望だった。自由な社会、人権が法律で保障してくれる国や社会で暮らしてみたかった為だった」と簡単に返答した。

60年前に、私達在日コリアンが、北朝鮮が独裁国家で、外部とは完全に閉鎖された国、鉄格子は無いが監獄同様の社会であること、国民全体が自由と人権を剥奪され、奴隸のように酷使されている国だ、と言う事実を知っていたならば誰一人、帰国に同意しなかったと思っている。政治宣伝とは、上述したように威力が有って怖いものであると痛感した。自由と人権がどれ程貴重なものか、生き地獄を体験した人たちは知っている。

帰国事業とは、全部、虚偽宣伝と誘拐劇であったといえる。北朝鮮に北送されて政治犯収容所の犠牲になった多くの在日朝鮮人、元韓国人で大村収容所を釈放になり、北朝鮮に行っ

てスパイ容疑で政治犯収容所に送られて殺された人数は、私個人の推定では約1万8000人から2万人に及ぶと思っている。もしかして、それ以上にオーバーしているかもしれない。

「眞実とは、体験者、犠牲者だけが知っている。以上である。」

2019年12月6日

木下公勝、別名・李相峯

私が生まれた国

脱北帰国者2世 金順姫

まず先に北朝鮮には私の家族全員が残されているため、実名や特定される場所、家族については発言を控えることをご了承ください。

私は北朝鮮の地方の都市で生まれました。お父さんは感染症の予防や防止をする医療機関で働いており、お母さんは家庭にいました。日本に父側の親戚がいて仕送りをしてくれたので、地域では割と裕福な生活をしていました。

私は高校を卒業して平壌の大学で勉強を始めましたが、4年生で大学を中退して脱北することになりました。脱北した理由は山ほどありますが、時間の関係上、教育に関する内容だけを報告いたします。

＜朝鮮労働党が決めたことは必ず守らなければならない＞

北朝鮮では朝鮮労働党が決めたことは命を失うことがあっても必ず守らなければなりません。ここで朝鮮労働党とは「金一家」のことです。党が決めたことを逆らうとひどい目に遭うということを幼い時からしっかりと教わります。

いくつか例をあげます。まず、小学校、中学校、高校では資源を提出しなければなりません。北朝鮮での資源とは、紙類、布、ビニール、ガラスやガラス瓶、アルミニウム、銅、鉄などですが、毎年、強制的に一定量を提出しなければなりません。例えば、古い紙を一人当たり小学生は2kg、中学生は5kgなどと決まっていて、期限内に提出しなければなりません。期限が近づくにつれ提出していない子はクラスや学校生徒の前で名前を呼ばれ、怒られ、最終的には授業にも参加させてもらえない。

新学期が始まると、紙類の目標を達成した子は教科書を多めにもらって、達成できない子はもらえません。配られる教科書も新しいものではなくボロボロになった古い教科書で先輩からの下りものです。古い教科書も十分にないため、毎年30人くらいのクラスに、例えば数学の教科書は5冊、国語は7冊などしか配られません。

生徒が提出しなければいけないのは資源だけではありません。毎年、ウサギの皮も1枚ずつ提出しなければなりません。軍隊の冬の帽子や手袋などに使われます。また、小さい頃から強制労働を強いられます。

中学3年から春は授業を中断して1ヶ月から1ヶ月半ほど泊まり込みで田植えの手伝いに行きます。秋になると1ヶ月ほど授業を中断して稻刈りに行きます。食料がないためドングリを拾ったり、冬の燃料も自分たちで解決したりしなければならないため、薪を集めに山に行くので2週間ほど授業を休みます。

その他、夏休み、冬休みがあり、授業の4割以上が「金一家」の授業であるため、数学や国語、英語などは予定より遅れます。終わらないまま学年が終了することも多々あります。

大学卒業後ですが、就職はもちろん個人の希望なんかは通りません。党が決めることに従うしかありません。しかし、平壌の出身の人たちは、人脈があり賄賂を使って希望の部署に行けたりします。地方から来た私には党の発令を待つしかありませんでした。クラスで地方出身は私しかいませんでした。

大学4年が始まった頃、みんなが行きたがらない就職先に私が行くかも知れない噂が流れきました。分かってはいましたが、現実を突きつけられた瞬間「この国では私の未来や夢は期待できない」と改めて思い知りました。そして大学4年生の2ヶ月で中退し、脱北を決意しました。

12月4日 正午～4時 北朝鮮人権特別報告官 キンタナ氏とNO FENCE会見

12月28～4日の日程で来日されたキンタナ氏と強制収容所問題で会見しました。キンタナ氏は北朝鮮が否定し続けていた強制収容所(政治犯収容所)の存在を北朝鮮当局にどう認めさせたか、その方法を我々に尋ねました。